

【研修報告】

第2回世界災害看護学会での発表を終えて

— The Meanings of Disaster Relief Nurses' Experiences in Disaster Nursing —

中 信 利恵子*¹

はじめに

第2回世界災害看護学会（World Society of Disaster Nursing Research Conference 2012）は、2012年8月23～24日イギリス・ウェールズ・カーディフで開催された（山本，2012）。今回の学会の参加者は世界25カ国から約200名であった。筆者は1日目のConcurrent Presentationにおいて、「The meanings of Disaster Relief Nurses' Experiences in Disaster Nursing（看護者の災害看護の体験の意味づけ）」を口演発表した。本稿では学会の概要の紹介と筆者の発表内容について述べる。



写真1 学会会場（Cardiff City Hall）

1. 学会の概要

1) 世界災害看護学会（WSDN : World Society of Disaster Nursing）について

世界災害看護学会は、災害時における人々の生活と健康に寄与するために、知識や情報の共有化を図り、災害時の看護ケアのグローバルスタンダード化に向けた検討を行うことを目的に2008年に設立された。2010年1月に神戸で第1回国際学術会議が開催され、今回のイギリスのカーディフでの会議が第2回目の開催となった。世界で様々な災害が発生している現実から、今後もこの国際学術会議において地球規模での知識や情報の共有は重要な課題であり、

日本がこの学会で果たす役割は大きい。

2) 学会の主なスケジュール

開催前日、学会長の所属する大学（University Glamorgan）のクリニカルシミュレーションセンターの見学ツアーがあった。残念ながら、筆者は前日午後に現地に到着するスケジュールであったため見学ツアーへの参加はできなかった。また、夕刻から学会会場であるCity Hallの隣のNational Gallery & Museum of Wales（ウェールズ国立博物館&美術館）の1階ロビーにテーブルをセッティングしオープニングセレモニーが開催された。セレモニー前、参加者がワインを片手に絵画を鑑賞し写真撮影するなど粋なおもてなしであった。ウェールズ地方の伝統的な音楽の演奏と歌と踊りが披露された。

大会1日目は、ゲストスピーカーによる講演と口演発表、示説発表が行われた。日本では災害といえば地震や津波など「自然災害」を思い浮かべるが、例えばイギリスではテロなどの人為災害なのだとなり、地域が変われば認識も変わると改めて実感した。大会2日目は、パネルディスカッションとゲストスピーカーによる講演、口演と示説発表が行われた。2日間の口演による発表は39題で、そのうち日本の発表が18題（他国との共同研究1題含）であった。また、示説発表は60題で日本の発表は34題（他国との共同研究2題含）であった。日本からの発表は東日本大震災関連の研究が多かった。日本の研究者の示説2題が表彰され、筆者自身にとっても研究者としての励みになった。

大会1日目の夜はカンファレンス・ディナーであった。昼間に議論をした学会会場の部屋が夜にはパーティ会場として飾り付けされ、パーティが開催された。テーブルは様々な国の方々と同席となり、ボディランゲージを駆使しつつ交流をはかることができた。本大会は人数が少ないために、参加者間の交流もしやすく、とても暖かくホスピタリティ溢れた学会の雰囲気であった。多様な国の多様な人々との交

*1 日本赤十字広島看護大学

流は、自分にとって大きな刺激となった。そして、日本を離れることで世界の多様性に触れて、日本のことがより理解できるということを改めて実感した。



写真2 プレゼンテーションの様子

2. 筆者の発表内容

筆者は、「The meanings of Disaster Relief Nurses' Experiences in Disaster Nursing - Enhancing the Resilience of Future Disaster Relief Nurses -」と題した研究を報告した。研究の背景は次の通りである。災害看護を行う看護師は救援者でありながら、災害看護の体験から様々な影響を受ける被災者でもある。また看護師は災害看護活動後の看護活動や人生に何らかの影響を受けている。看護師自身も支援を受けて、次の災害看護活動を意欲的に展開する力を得る必要があると考え、本研究に取り組んだ。そこで、看護師が災害看護の体験をどのように意味づけているのかを明らかにすることを目的とした。

過去約10年間に災害看護活動を行った体験があり、研究協力の同意が得られた、全国の74の赤十字関連施設に勤務する看護師への質問紙調査である。質問紙は文献検討と面接調査に基づいて作成した。質問紙の内容は、看護師の年齢、性別、教育背景などの個人特性と、看護師の災害看護の体験の意味づけについての9つの質問項目で5段階評定を用いた。データ分析は統計学的な分析方法を用いた。また、本研究は高知女子大学看護研究倫理審査委員会の審査を得て行った。

研究結果は次の通りである。質問紙の回収率は72.6%で、有効回答率は97.5% (n = 542) であった。平均値が高くばらつきが小さかった質問項目は次の5項目で、対象者の多くが同様の災害看護の体験の意味づけをしていた項目である。「災害看護体験は自分にとって学びの場」、「災害看護体験は使命感が湧く体験」、「災害看護体験は看護師として貴重な体験」、「災害看護体験は知識・技術を高める向上心を

刺激する体験」、「意識になかった活動の意味を感じた」。質問項目「災害看護活動が十分にできなかった、情けない思い」はデータの平均値は中程度だったがばらつきが大きかった。以上の結果から次の点が見出された。多くの看護師が災害看護の体験に自己の成長に繋がる肯定的な意味づけをしていた。一部の看護師は十分にできなかった、情けないと意味づけていた。フランクル (1947) が、自分の可能性が制約されていることがどうしようもない運命であり、避けられず逃れられない事実であっても、その事実に対してどんな態度をとるかということで実現される価値を「態度価値」だと述べている。人が自己の体験をどう受けとめ、どう意味づけるかはその人が物事をどのように価値づけるかによって決まる。つまり看護師が自己の災害看護の体験をどのように受けとめ価値づけたかによって、体験をどう意味づけるかが決まるといえる。

おわりに

今回、筆者は国際学会で初めて口演発表を行った。少人数で議論できる環境での発表であり、参加者との質疑応答も緊張感が少ない状況で行えた。海外の参加者から、筆者の研究の視点は興味深いという反応をいただき、言葉や民族は違っても共通する考えはあると実感した。国際学会で発表を行うことで自分の視野をさらに広げることにもなる。今後も国際学会で研究の報告ができるよう努力していきたい。

本研究にご協力くださいました対象者ならびに関連施設の皆様に深く感謝いたします。今回の発表は日本赤十字広島看護大学海外旅費助成を受けて行いました。このような貴重な機会を与えてくださいました本大学に深く感謝いたします。



写真3 学会ウェルカムパーティで出会った方々と

文 献

Viktor E. Frankl (1947). *Trotzdem Ja Zum Leben
sagan*／山田邦男訳 (1993), *それでも人生にイ
エスと言う*. 東京, 春秋社.
山本あい子, Donna Mead OBE (2012). 2012年世
界災害看護学会 (2012World Society of Disaster

Nursing Research Conference)のウェブサイトへ
ようこそ, 第2回世界災害看護学会のご案内,
2012年10月30日, [http://www.wsdn2012.com/
wsdn2012.com/index.php?option=com_
content&view=frontpage&Itemid= 1](http://www.wsdn2012.com/wsdn2012.com/index.php?option=com_content&view=frontpage&Itemid=1)

